

## <特集コラム6>

# ブッククラブの可能性

柿内真紀

(鳥取大学教員養成センター)

## 1 教員養成センターのブッククラブ

教員養成センター主催のプロジェクト「学び・遊び・つなぐ」(学長裁量経費)のなかのプログラム「ブッククラブ」を筆者は企画・運営し、2018年度からは、担当する「人間と教育～教職入門(初等)～」(1年次配当教職必修授業)の授業の1コマにこのブッククラブを組み込んでいる。その意図には、教師になる人には本を身近な存在にしてほしいこと、本のある場を楽しんでほしいことがまずはある。本は授業や特別活動、学級通信の種(ネタ)にもなれば、担任クラスでの日々の語り、自分自身の気分転換、そしてグローバルでローカルな世界への入り口にもなる。だから、読むことが得意ではなくても、ネットの本屋サイトや、今や「リアル書店」と呼ばれるようになった本屋を訪問したり、本の装丁を味わったり、日本発サブカルチャーの代表である Manga (マンガ, コミック) を手に世界とコミュニケーションをとったり、さまざまな方法で本を日常に持ち込んでほしい。また、アイデアの源にもしてほしい。従って、もちろん、本のジャンルはなんでもよい。

本のある場であるブッククラブの場所は教員養成センターのライブラリーである。毎年度、蔵書を増やしており、現在、蔵書はおよそ1,900冊ある。ブッククラブと言っても、本を読んできて語り合うという形式にとらわれない、とにかく「本」を使えば何でもできるクラブをこの数年試している。

## 2 ブッククラブと未来の教師たち

今年度はブッククラブを5回開催した。参加者は先述の「人間と教育」の受講者(地域学部人間形成コース1~2年生)で、小学校または幼稚園の教員免許状取得をめざす学生たちである。受講者は10グループに分かれ、1回ずつクラブに参加することになっている。ここで紹介するのはその一コマである。その回には2グループ(5人ずつで計10人)が参加し、次の問いかけでクラブは始まった。実は最初の問いかけ以降の展開は、その時の参加者とその反応に伴って思いついた方法で試されたものである。

(筆者)「何をやりたいですか？」

(受講者)「何がありますか？」(何か選択肢はないのかという質問)

(筆者)「何もありません。」

(受講者:「ああそうか、やっぱりそうだよね」という表情を見せる)

そこで、グループ内で付箋紙に「やることのアイディア」を5分間で書き出すことを筆者が提案し、集まった付箋紙をテーブルに並べ、グループでベスト3を選出した。次に、2つのグループが合流し、両者のベスト3を披露して話し合い、そのなかから「やること」を決定した。決まったのは、ライブラリーの蔵書を使った、グループ対抗「本のタイトルしりとり」である。しりとりで出された本はどんどんテーブルの上に並んでいく。進むにつれて、特定の文字が出

やすいことがわかり、「ああ、また」との声があがる。ライブラリーでは、本を緩やかに仕分けた分野ごとに配架してあり、その分野名は本棚には明示していない。それは本屋で歩き回るように、小さなライブラリーを歩き回って本を見つけ出してほしいからでもある。蔵書は、社会科学系・人文科学系の専門書から、教科書、小説を含む文庫、新書、絵本、コミック、事典など多岐にわたる。グループのメンバーは本を探して棚をあちらこちらへと歩き回り、さながらチーム競技の様相である。同時に、「こんな本がある」、「その文字ならあのあたりの専門書にありそう」など、いつもは通り過ぎる本も手に取っているように見える。やがて、テーブルの上の本が30冊になったところでしりとり遊びを閉じた。

30冊の本が表紙を上にして並ぶと、本屋の特設コーナーの平積みの風景のようである。ここから次の展開が始まる。①参加者10人でテーブルを囲み、ひとり3冊の本を担当し、本の出だしの一文だけを読みあげる。②読みあげられた直後に「せ〜の」の掛け声で、想像するその本のおもしろさの評点を1〜5点でそれぞれが叫ぶ。③4〜5点の声が多かった本が選ばれる。

こうして選ばれた本は、『ルドルフとイッパイアッテナ』（斎藤洋著）と『へそまがり昔ばなし』（ロアルド・ダール著）であった。そのうち、後者に収録されている「シンデレラ」を参加者が朗読した。偶然だが元放送部員であった朗読者の抑揚のきいた声や、イギリスの作家ロアルド・ダールによる思わず笑ってしまうストーリーの展開に、この朗読にはみんなで聞き入った。ダールのことを知らなかった参加者も、映画「チャーリーとチョコレート工場」の原作がロアルド・ダールのコレクションにあると知ることにもなった。

ここまでで90分のブッククラブである。この回の参加者10人のなかには、普段から本が好きである参加者もいればそうではない参加者もいる。授業の一環であるために仕方なく参加した受講者もいるだろう。それでも90分で本を使って楽しみ、最後の朗読を除けば、「本を読まない」ブッククラブで、少しではあるが、本に対する壁が低くなったようにみえた。大学生は本を読まない、のではなく、本は読むものと思いついでいるのではないか。だから本との間に近寄りたが壁があるのではないか。そうであれば、壁を開けばよいのである。

### 3 本のある場の持つ可能性

近年、学校図書館は「居場所」にもなっている。その例としてよく取り上げられるのが、神奈川県立田奈高校の「びっくりカフェ」である。田奈高校のサイトによれば、「田奈高校では、校内の図書館を在校生や卒業生の居場所づくりとして活用する「びっくりカフェ」という取組を行っています。コーヒーやジュースを無料で飲みながら、くつろいだカフェのような雰囲気の中で生徒と先生が気軽に利用できる居場所として、また、若者を支援する専門家と大学生のボランティアがスタッフとなり、何気ない会話や生徒の悩みを聞いてくれる相談窓口として機能することを目的にスタートしました」とある。図書館は中退の予防策やキャリア支援としての場でもあり、本のある場として居場所になり、教員にとっても生徒にとってもそこに集まる人びとや地域社会とのつながりの場になる。学校内にはあるが、オルデンバーグの「サードプレイス（第3の場所）」（第1の場所は家庭、第2の場所は学校や職場など）として、もしくは第2の場所と第3の場所をつなぐ「2.5プレイス」モデル（鈴木・松田・石井）としての機能を果たしているとも言えよう。また、そこに集う人びとにとって社会関係資本のひとつにもなる。社会関係資本の豊かさは、たとえば志水が指摘するように、社会経済的格差による子どもの学力格差を小さくする効果があるとされる。

サードプレイスを教師が知り、教師自身もそこに居心地の良さを感じる。そして、サードプレイスへとつながり、つなげていく。チーム学校や地域と学校の連携にもつながる。つながりの場があることは、社会関係資本の豊かな教員の成長を促す可能性を持っている。ブッククラブが本のある場を開く試みとなり、そこで未来の教師である参加者たちが本のある場を楽しむことを知るとすれば、すでに教員の成長への道のりが始まっているのかもしれない。

#### 参考文献

- 神奈川県立田奈高等学校 <https://tana-h.pen-kanagawa.ed.jp/career/cafe.html> (2020/2/12 最終閲覧)。
- レイ・オルデンバーグ『サードプレイス：コミュニティの核になる「とびきり居心地よい場所」』、忠平美幸訳、みすず書房、2013年。
- 久野和子「「第三の場」としての学校図書館」、『図書館界』63(4)、296-313、日本図書館研究会、2011年。
- 志水宏吉『「つながり格差」が学力格差を生む』、亜紀書房、2014年。
- 鈴木晶子・松田ユリ子・石井正宏「高校生の潜在的ニーズを顕在化させる学校図書館での交流相談：普通科課題集中校における実践的フィールドワーク」、『生涯学習基盤経営研究』(38)、1-17、東京大学大学院教育学研究科生涯学習基盤経営コース内『生涯学習基盤経営研究』編集委員会、2013年。
- 松田ユリ子『学校図書館はカラフルな学びの場』、ペリかん社、2018年。

※本稿は JSPS 科研費 15K04361 および 16K01869 の助成による。

柿内真紀（鳥取大学教員養成センター教員）